

令和元年度 京都市景観市民会議 報告書

目 次

0. 目的
1. 令和元年度京都市景観市民会議開催概要
2. 第1部話題提供概要
3. 第2部ワークショップで出された意見の概要
4. 全体会議(総括)の概要

0. 目的

市民、事業者、行政等が集まり、京都らしい、より良い景観づくりに向けた意見交換を行う場として、「令和元年度景観市民会議」を開催する。「京都らしい魅力ある夜間景観づくり」をテーマに、創造的で活発な意見交換ができる場を整え、景観政策の進化に寄与するとともに、市民の主体的な景観づくり活動につながる会議とすることを目指す。

1. 令和元年度京都市景観市民会議開催概要

日 時：令和元年12月7日（土）午後2時から午後5時（予定）

場 所：ひと・まち交流館 京都 3階 第4, 5会議室

テーマ：京都らしい魅力ある夜間景観づくり

プログラム

第1部 話題提供 14:00～

- ・開会挨拶
- ・話題提供① 中村 美寿々 氏（株式会社ライティングプランナーズアソシエーツ）
- ・話題提供② 大島 祥子 氏（一級建築士事務所スーク創生事務所代表）
- ・話題提供③ 門内 輝行 氏（大阪芸術大学教授，京都大学名誉教授）

第2部 ワークショップ 14:40～

第3部 全体会議（総括） 16:20～

終了 17:00

2. 第1部話題提供概要

第2部ワークショップでの市民公募委員による議論のきっかけづくり、およびその素材として、3氏による話題提供を行った。各氏の概要を以下に示す。

話題提供①「魅力ある夜間景観づくりに向けてー京都でしか出会えない夜景をつくるー」
中村美寿々氏（株式会社ライティングプランナーズアソシエーツ）

■世界の夜景の美しさ

世界の都市の夜景を収集する照明探偵団の取組みの経験から、都市の夜景というのは、それぞれのまちの表情を非常に色濃く映しているものになっているといえる。

シンガポールで夜間景観のガイドラインを提案した際には、シンガポールらしい光とは何かを考えた。熱帯である、日差しが強い、緑が多い、人種のるつぼである、マリーナベイなどの水景が特徴である、などといったものをシンガポールから抽出し、提案した。計画から10年を経てガイドラインに沿った整備が進んできた結果、現在のマリーナベイの夜間景観が出来上がっており、ガイドラインが守られている街になってきた。

長崎では、湾に対して斜面の市街地が広がる地形特性を踏まえ、遠景の夜景みがき+中・近景の夜間景観づくりを軸とし、コンセプトワードとして、原爆、キリシタンといった長崎の歴史、文化の多様性などを反映させた提案を行い、現在整備が進んでいる。

■京都らしさとは

京都でも一昨年、京都市の委託で市内各エリアを調査した。京都は、長崎やシンガポールのように遠くから見た夜景がメインとしてあるというよりは、心に残る歩く景色が沢山あるようなまち。「京都」と言っただけで皆が思い浮かぶ洗練された和の灯りが綺麗に残っている。一方、ライトアップの仕方や、道路の照明が基本的に白いなど、その良さを活かしてきれていないところもある。また、心地よい暗さを大切にできる文化が残っているのは京都ならではの、鴨川や先斗町では、暗いところで皆が楽しそうに過ごしている姿が京都らしい。

■社会実験の記録

今年度市内5か所で社会実験を実施・計画している。三条大橋や岡崎の慶流橋では、照らし方、照らす部分を変えて、効果的なライトアップの在り方を検討した。鞍馬口通りでは、住宅街の既存照明にフィルタをかぶせ、暖かい色目に変える実験をしている。京都は歴史や文化があり、観光、お祭り等非日常と日常の場面が融合している町。その中で、どういった光がよいのかを、これらを通し、一緒に考えていきたい。

話題提供②「市民の行動から祝祭・風物詩の夜の景観づくりを」

大島 祥子氏（スーク創生事務所 代表）

■まちづくりに資する非日常の夜間景観づくり

装置・設備としての夜の景観ではなく、「市民の行動からの祝祭・風物詩」、「非日常の夜の景観をつくる」という観点から、実際に企画運営に携わったものについて事例紹介する。照明、演出などの技術の進化や多様化、ライフスタイルの多様化、また観光面での夜の京都の魅力を満喫したいといったニーズの向上などを受け、場所や時期、シチュエーションによって、演出と魅力の向上が図られており、既に新しい取組みが風物詩となっているものもある。昼間は見えてしまうものでも、見せたくないものは灯りを当てなければ見えないう、夜の特徴にはそのような点がある。参加型の夜の楽しみとして、夜の景観の演出、つまり、あるものではなく作るもの、そういった面があっても良いと考える。照らすだけでなく、+αとして京都のまちづくりに資するような、そういった目的・効果をビルトインした事例を紹介する。

■三条あかり景色

多世代の参加によって成り立った、ロコミ拡大型ネットワークの主催で実施。プロジェクターを 60 台以上使い、三条通の各ビル壁面に映像を上映した。プロジェクターを使う電気は設置箇所から引かなくてはならないため、地元商店や住民の理解と協力によって成り立った。来場者へのアンケート、交通面の社会調査も実施し、夜間のイベント型映像上映会をすることによる影響も探った。3 日間で 15 万人の来場者が訪れたという調査結果も出ている。まちづくり無関心層がまちとの関わり方を知るというきっかけとなり、眺める景観から、自らつくっていく、そういったものへ誘引する取組みとなった。

■岡崎ときあかり

京都岡崎魅力づくり推進協議会というエリアマネジメント組織が主催となって実施。明治中期に第 4 回内国勸業博覧会の会場として改めて開かれ、現在に継承されている祝祭空間として 100 年前の先人に習い、新しいまちづくりを京都岡崎から創造発信していこうという趣旨で企画した。コンペティションを併設することで、世界中のクリエイターから作品を提供して頂いている点が特徴。

■鴨川提灯行列

「市民の行動が美しい夜の景観を形成するのではないか」という問題意識に基づいたもので、市民・来訪者参加型の新しい風物詩の景観づくりという趣旨で実施。市民が着物を着て提灯を持ち、鴨川河川敷を行列する。定期開催をしていく事によって誰でも参加できる夜の新しい景観づくり、風物詩づくりにしていきたい。

以上紹介したものは、あくまでも非日常。演出やイベントを通じて都市、まちとのかかわり方を提案すると共に、イベント的に実施するのではなくて、まちづくりに資する・つながる効果を期待している。

話題提供③「夜間景観の形成について」

門内 輝行氏（大阪芸術大学教授・京都大学名誉教授）

■夜間景観を形成する意義、目標、方針

何のために夜間景観を整備しなければいけないのか、目標や方針をどう定めるのかという事が重要だ。京都市の景観政策の中では、「進化する景観政策」という事で、広告物や、地域景観づくり協議会、歴史的景観保全等に取り組み、その連続で「夜間景観」が取り上げられている。東京は、とにかく特区制度を入れ、超高層が建ち、渋谷など大開発が次々に行われている。シンガポールも同様、発展する大都市の場合は、夜間景観においても都市構造全体を見せて行くという方向に向いているが、京都では如何にあるべきかを考える必要がある。

■地域の個性を活かした夜間景観形成

京都で「夜間景観」と言う時には、ランドマークになるようなところを突出して取り上げていることが多いが、日常の生活空間の中で灯りをどうしていくのかという点も重要。暗がりもすごく大事で、「東京は太陽が似合う都市だ、京都は月が似合う都市だ」と言われるように、そういう暗がりも含めて京都の夜間景観全体をどうしていくのかをやはり議論していかなくてはならず、その中で、頂点にあるものから裾野にあるものまで取組まないといけない。これまでは発光体自体をあまり扱っていないが、グレアの抑制や、色温度、光害問題への対応など、光の質の向上も大事となる。

大阪では、夜間景観形成の意義は、都市の風格の向上、活力の創出、地域の個性の創出、豊かな生活環境の形成という事で、水辺の灯り、俯瞰の灯り、境界の灯り、個の灯りの4つのテーマをメインにしている。

面出氏がやった京都駅は、普通の駅に比べると圧倒的に暗いが、なかなか良い雰囲気を作っている。面出氏が提示された京都の夜間景観を考える5つのキーワード、温かい灯りと、陰影礼賛、低い位置の灯りが大切ではないかという人間尺度、行燈のような優しい拡散光、さらにスマートライティングといったエコの問題、そういった点から考えていく必要がある。

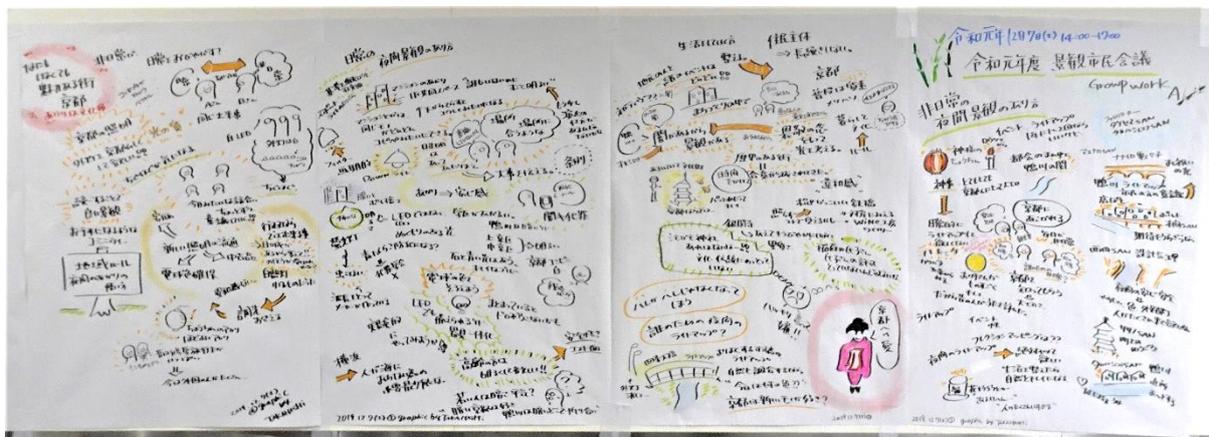
■取組む際の視点

月のクレーターが写った写真を上下ひっくり返すと、同じクレーターが、出っ張ったり、凹んだりして見える。それは、我々は、上から光が来るものと思い込んでいるからである。上から光が来るという前提で凹凸を判断している。では、なぜライトアップをするのかというと、それが非日常だからであるといえる。色の問題や灯りの問題は、人間の生理現象とも絡んでいるため、社会実験を実施したり、皆に参加してもらって色々やってみることがとても大事な事。景観というものは、皆が持っているコンセンサスや人間が持っている生理的なコンセプトと深く絡んでいるということ踏まえて考えることが大切。

3. 第2部ワークショップで出された意見の概要

- ・【A】～【E】各グループ討議まとめ

令和元年度景観市民会議 グループ討議まとめ【A】



□参加者：笹野 航、本間 睦朗、前中 由希恵、西田 教子

□進行役：竹山 奈乙雪、高橋 裕美

□グラフィッカー：高橋 あけみ

1. 現状への評価

(非日常の夜間景観)

- ・お祭りや地蔵盆のときだけ見られるあかり（例えば祇園祭の駒形提灯）の京都らしさ
- ・イベント性のあるライトアップは、（京都市民以外が）京都を知るきっかけになるのでは
- ・夜のマチの中で、文化財建造物がライトアップされているのは京都らしさを感じる
- ・マチの真ん中に（河岸の街路灯などがなく）鴨川の闇があるのが、非日常感の最たるもの

(日常の夜間景観)

- ・住まいの近くに来たコンビニの店内が真っ白で残念
- ・（市の規制によった結果）誰もいないマンションの玄関が妙に明るく、逆に気持ち悪い
- ・マンションの照明などは、誰も特に（良否を）意識することなく、改善の声もない
- ・アーケードの明かりと全く別に道路照明が設置されてあるなど、縦割りの弊害がある
- ・お茶屋街や先斗町では、特になにをするでもなく夜景が整っている
- ・高齢者にとっては明るい環境が必要かも

2. 今後に向けた提案

(非日常の夜間景観)

- ・一過性のあるイベントでも、地域住民から意見を聞きながら実施するのが良い
- ・市民感情として、住宅が密集する地区では夜間のライトアップはやめて欲しい
- ・祝祭空間といえども、現代的な強い光でいろんなものを照らすのはどうか

(日常の夜間景観)

- ・三条大橋のライトアップ（を恒常的にするなら）は、背景の夜景と一体的に感じられるものなら良い
- ・エリアごとの夜間照明に統一感があるだけで夜間景観はずいぶん良くなる
- ・（LED 灯に更新された後）何年も同じ（昼白色）光をみるのはいたたまれない。行政が補助をし、電球色のランプに交換できるなどの仕組みが望まれる。
- ・街路が暗いからといって犯罪率が高いということはない（地域コミュニティがそれを補完しているのでは？）

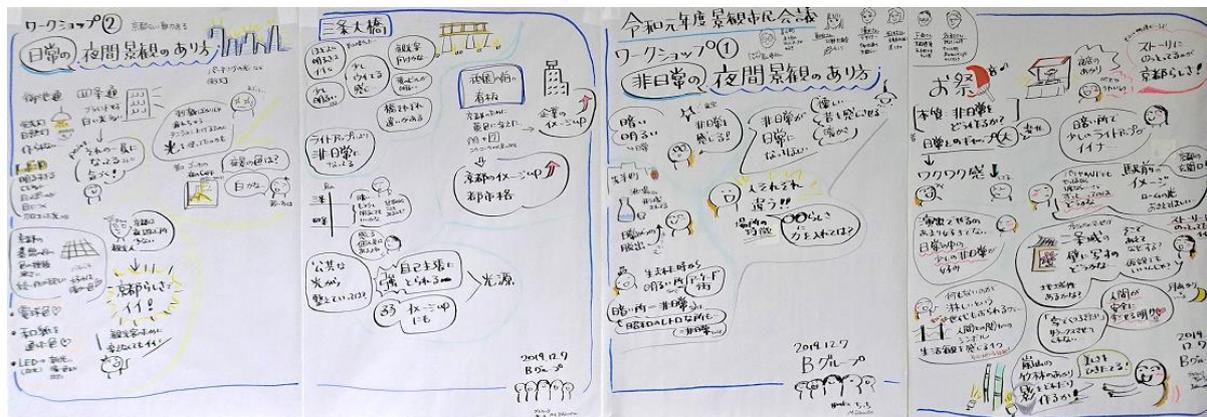
(実現に向けた課題・留意点)

- ・（最近に交換された）LED 灯の点灯可能時間は長いので、交換する時期が来る前に、どうするかを皆で話し合う機会があれば
- ・周りの人達を巻き込むような形で考える機会をもつ
- ・技術が発達し、なんでも出来るからといって、文脈にそぐわない表現はいかがなものか
- ・ただ明るいだけがいい訳ではない
- ・誰かの日常と別の誰か(ex, 観光客)の非日常を、どこで折り合いをつけていくか

3. 所感

夜間照明や夜間景観についてを、地域住民や皆で話し合う機会が必要ではないか、といった意見が散見した。ガイドライン（すなわち行政区としての方針）の不在はもとより、プロジェクション・マッピング等の現代的な技術による夜間景観の操作への好意的な評価の一方で、それを問題視したり、それに生活を侵害されている市民が少なからずいることの現れかと思われた。

振り返りの時間にグラフィッカーから指摘あったのは、何度も”闇”という言葉がでたこと。参加者の一人からは「敢えてやらない」という表現をされたが、照明にとっての地になる”闇”または”くらがり”に育まれた文化を捉えること、更には夜間景観による再表現は、上質の観光資源になるだろう。



□参加者：市民公募委員 清水響 副田朱音 田村直子
有識者 下西伊佐男 名和啓雅

□進行役：ファシリテーター 青山優子 □グラフィッカー：石本麻由香

1. 現状への評価

(非日常の夜間景観)

- ・非日常は個人差や年齢場所のとらえ方、条件でも大きいので一概に考えるのは難しい。
- ・非日常を作るとして考えれば、祭りの灯りは大きく地域の特徴が感じられるものが良い。
- ・ライトアップされる場所のストーリーが大切で、それを無視すると必要性を感じない。
- ・場所が持つ意味を個人あるいは企業は考えているか？自身が発行元である自覚が必要。
- ・闇があるからこそ、美しく見える対比が京都らしい。

良い例：嵐山の竹林ライトアップ

悪い例：二条城のプロジェクトンマッピング

(日常の夜間景観)

- ・日常も住む場所や仕事、状況によりとらえ方が変わる。
- ・蛍光灯、LED、白熱灯だけでも感覚が変わるので日常の状態を考える。
- ・観光者向けか市民向けか、あるいは観光客向きか、よく考える必要がある。
- ・日常の夜間景観の美しさを引き出すものは日常が華美にならないこと。
- ・日常、非日常は、個人や年代、場所など考え方に開きがあるので、行政に指針を示してもらいたい。

良い例：京都ということを配慮した企業の看板

悪い例：京都玄関口である京都駅の企業（ローム）ライトアップ

2. 今後に向けた提案

(非日常の夜間景観)

- ・京都のストーリー（その場所の歴史など）を考え、その場所にあったものをイベントとしてすることによって、京都らしさを出す。
- ・その場所の個性を丁寧にライトアップする。
- ・非日常では高揚感があってもいいが、日常とのギャップがあっても楽しい。そういうメリハリのあるものを考える。

(日常の夜間景観)

- ・日常と非日常の場所を決めて、その場にあった照明を考える。
- ・寒色系の光より暖色系の光にしてほしい。
- ・夜間の照明は明るくなればなるほど強く、自己主張が強いが、あえて弱くすることによっても、配慮としてのイメージアップになる。
- ・冷たい感じがする蛍光灯、LEDを抑え、温かい電球色を増やすあるいは入れ替える。
- ・自身が光源となっていることを意識して考える。

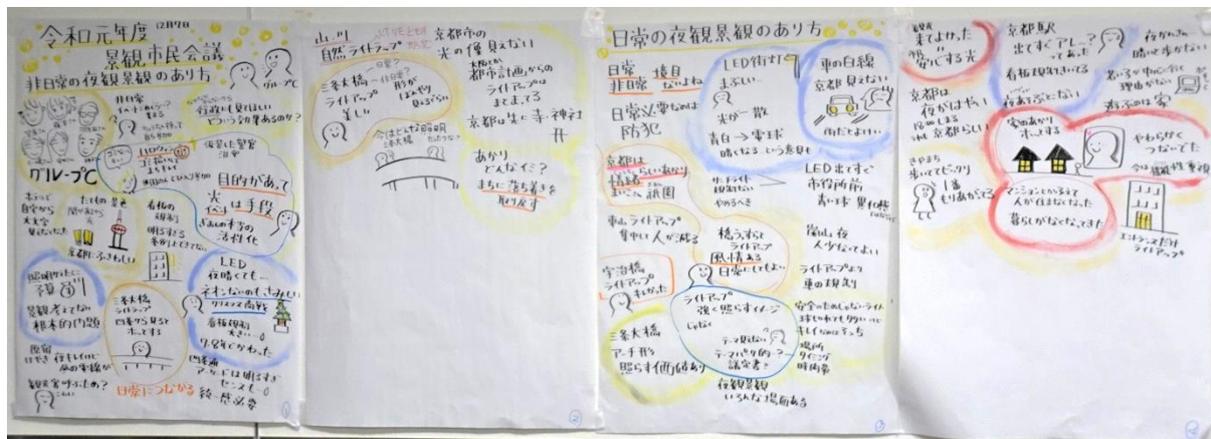
(実現に向けた課題・留意点)

- ・観光客向けと住民生活との視点を考える。住民が感じる京都らしさは観光者も京都らしいものはそういうものと認識していけるのでは。
- ・京都らしさとは何かを思い、他地域とは違う視点があってもいいのでは。
- ・光源や光のバランスに統一感を持たせたいが、個人レベルでは難しい。まずは、公共の光から統一感や整えていってほしい。
- ・夜間景観に対する認識が浸透していない。
- ・企業や経済効果など安全、利益、平穏など多くのことが重なる点。

3. 所感

夜間景観とは、日常非日常の分け方が難しく、個人の感覚や状態、年齢や環境の背景などにも左右される。そう考えると場所の持つ意味や歴史によって、夜間景観の在り方を考えるべきではないかと思う。場所の中でも経済効果や防犯安全面、休息や健康を考え配慮すべき点は多く、その地域の人や利用者を考え日常非日常を理解することが必要。

京都という世界的な観光都市としての多くの要望もあるが、京都らしさ、京都独自の培われたストーリーを無視せずに企業、個人も考えていく必要がある。そういう点では、京都は闇を大切にしている部分があり、暗い所があるからこそ、光を受けるものが美しく見え、想像を生んでいるところがある。そういう点を観光客にもわかってもらえるような夜間景観を考えていけば、市民にも優しい夜間景観になるのでは。市民は京都の品格を大事に思っているということが強く感じられた。



□参加者：神戸啓、安井葉日花、小嶋享子、羽生田英雄（敬称略）

□進行役：笠原啓史、藤本奈保子 □グラフィッカー：海津敦子

1. 現状への評価

（非日常の夜間景観）

- ・ホテルなどが建ち、自宅から大文字が見えなくなった。
- ・ハロウィンの光のイベントに参加した。ゴミ拾いなども行い光のイベントはまちを考える手段。
- ・看板の規制で、クリスマス商戦のネオンが寂しくなった。（四条河原町）
- ・三条大橋のライトアップは美しい。日常か非日常か？ 形がぼんやり見える程度だった。
- ・あかりにどんな意味？ まちに落ち着きを取り戻す。
- ・京都市の光の計画が見えない。大阪とかは都市計画からのライトアップがまとまっている。
- ・ライトアップは強く照らすイメージ。テーマパーク的。温暖化対策に逆行しないか？

（日常の夜間景観）

- ・日常・非日常の境目はない。
- ・日常に必要なのは防犯のあかり。
- ・京都らしいあかり→情緒あるあかり

- ・橋をうっすらと照らすことで、風情ある日常にしてもよい。
- ・車道の白線、京都は見づらい。照明の影響か？
- ・家から漏れるあかりがホッとする。やわらかくあかりがつながっていた。

2. 今後に向けた提案

(非日常の夜間景観)

- ・山、川など自然を照らすことで防犯にも役立つ。派手なライトアップというより灯りをもとす程度が良い。

(日常の夜間景観)

- ・市民にとっては安心する日常のあかり。観光客にとっては、来てよかったと思えるあかり。

3. 所感

- ・日常のあかりの質の向上が、来訪者にとっても魅力的なものになる。それが京都らしい落ち着いた情緒あるあかりになるのかな・・・と感じた。(笠原)



- 参加者：巽容子・Geng yuan・魚森理恵・太秦こうじ・道家駿太郎
- 進行役：遠島和恵
- グラフィッカー：井上保夫

1. 現状への評価

(非日常の夜間景観)

- ・非日常とは・・・？葵祭、祇園祭など生活に組み込まれている市民も多い



京都らしい・京都らしさ？

観光客にとっての非日常も市民にとっては日常なものもある

- ・ライトアップなど期間限定でしていても、それをしらない人が期間外に住宅地などの細い道にまでうろうろしている。そうでなくても期間中、地域の住民にとってはある程度の我慢は強いられている。

(日常の夜間景観)

- ・外灯がLED化し、まぶしすぎる。安心・安全面で明るさが必要かもしれないが、2階の道路側の部屋がまぶしくて困るようでは問題。
- ・特に生活に直結している外灯（家の前の外灯）は心地よい光であってほしい
- ・外灯の高さも心地よさとは関係があって低い方が落ち着く。
- ・「家ナリエ」は規制できないのか？ せめて、点滅はやめてほしい・・・
- ・昔は各家の明かりがもれて、道に明かりや人の気配をつたえていた

2. 今後に向けた提案

(非日常の夜間景観)

- ・何のためにやっているのか。ということを確認にし、住居地域・商業地域などと分け、違いを出してほしい。
- ・京都らしさ＝品が必要ではないか
「渡月橋」では作画的とも思われる山全体へのライトアップではなく、嵐山・渡月橋ならではの「月」を楽しむような演出があってもよいのではないかと。
- ・明かりを楽しむ＝たくさん照明を用いる。だけでなく、中には夜の暗さを楽しめる明かりがもっとあってもいいのではないかと。
- ・暗さがあっての明るさ。という考え方もある

(日常の夜間景観)

- ・LEDが悪者のなっているけど、色々できるLEDなのだからもっとその場にあった使い方をしてほしい。
- ・2階の高さからまぶしいくらいの外灯があっても、実際必要な箇所が明るいかは疑問があり、必要は箇所に必要な明かりがあればいいのでは・・・
- ・「夜」をしみじみ感じることでできる京都であってほしい

(実現に向けた課題・留意点)

- ・京都らしさのある品格。品のある照らし方・照明色。
- ・イベントして明かりを用いる場合は、住人の日常も守るような人の動線なども含め考えてほしい。

3. 所感

「夜間景観」あらためて「夜」の暗さを考えさせられました。ただ闇雲に照らすのではなく、照らし方を照らす色をしっかりと考えないといけないということも含め。

「京都らしさ」・「品格のある」というキーワードはやはり夜間景観にも出てきて、市民の意識の高さ・京都の特別感を感じました。鞍馬口通りの外灯の色を変える実験はある程度受け入れられていたのに反し、三条大橋のライトアップは「実験台になっているのでは？」と少々批判的な意見があったのは、市だけではなく企業が前面に出てきたことが良く思われなかった？（実験台に・・・）されている感が強く出ての拒否反応かな・・・とも感じました。

4. 全体会議(総括)の概要：門内輝行氏

■ライトアップの役割

京都の中で、長い時間をかけて作り出されてきた文化的なものや、人々の暮らしの中で作り出されてきた様々な知恵など、これまで見えていなかったものを、夜ライトアップすることによって見ることができる。文化的レベルの高いものから、日々の暮らしの中での、一輪の花をちょっと軒先に飾るといった心遣いのようなものまで、多様なレベルのものが、スポットライトを当てることによって、気付きになる。京都の中で、昼間には必ずしも見えなかったようなものを丹念に拾い上げて、リストアップしていくことが、まずは、ライトアップの一番大きな役割である。

■自己理解の機会としての夜間景観

クローズアップした物を見て、感動する人もいるし、白ける人もいる。同じものを見ても、反応が違うということがある、恐らくそのことを通して、自分が何に関心を持っており、自分が何者なのかということが分かる。「こういうものに感動するんだ」と、自分がどういう人間なのか分かる。

人間が多様であるように、同じものを見ても、感動する人もいればそうでない人もいるが、それはそれで良い。対象物を眺めることで、自分たちを理解することができる。その行為が大切で、それを通して、京都のまちを知る。京都の歴史を知る。そして、そこに住んでいる自分を知る。あるいは、コミュニティを知ることができるのではないか。ライトアップに関しては、そういうことが大事なのではないか。

■人材のストックにつながるイベント

美しい景観があること、魅力的な景観があること、それから住みよい環境があることは、多くの人がそこに住み続けたいと思うこと。それは人材のストックにつながる。昔は、石油などのエネルギーや物などが資源だったが、知識社会の資源は、人材。イベントでライトアップをするということは、都市がどのように活動しているかを知ることにもなり、その活動が出来るということは、コミュニティの力になっているということである。

■小さな力の集結

イベントは、大規模なものもあるが、花一輪、燈籠一個でも、百軒が飾れば、立派なアートとなる。小さな力を多く集め、小さなスパンで皆が努力を重ねていくと、気付いたら、大きな変化が起こっている。非常に大きな規模で、都市構造のレベルで見せていくような景観の例もあるし、一方では、安心安全も含め、身近なところでやるということもある。ここから価値あるものを皆で共有するということが大切である。

■日常と非日常の関係

日常と非日常は、非常に相対的なもので、京都においては特にそう言えるのではないか。

京都は暮らしが文化に、生活が文化になっている。たとえば「花を生ける」は「花道」、「お茶を飲む」は「茶道」、「書を書く」は「書道」、これらの行為がアートに、生活そのものが文化になっている。京都は生活が洗練されており、洗練されているということに誇りを持っている。持続するかどうかというのは、最後はお金ではなくプライドであるから、シビックプライドというものは大事。

■手段としての夜間景観

京都でライトアップは、京都を深く知る、そして絆を深める、そのための手段が夜間景観。これまでは空間の方を考えてきたが、これからは四季のうつろいなど、時間のデザインを考えていく必要がある。そのうちの一つが夜間景観であると捉えるべき。